

2021年2月21日 説教「苦難の向こうに慰めが」

創世記 48章 1～12節

147歳にまでなったヤコブはヨセフに、その葬りについては、エジプトではなく、カナンの先祖の地にと要望したのです。

1. ヤコブ、死の床 (1～4節)

①父が病氣 (1) 「これらのことの後、ヨセフに『あなたの父上は病氣です。』と告げる者があったので、彼はその二人の子、マナセとエフライムを連れて行った。」ヤコブすでに自分の命が長くないことを予感していました。やがて、ヨセフは父ヤコブが病氣であるという連絡を受けます。医師の判断もあったでしょう。死が近いことをあらかず兆しは周りの者にも感ぜられたことでしょう。ヨセフは二人の子マナセとエフライムを連れてヤコブのもとに向かいました。

②床に座り (2) 「ある人がヤコブに告げて、『あなたの子ヨセフがあなたのもとにおいでです。』と言ったので、イスラエルは力をふりしぼって床に坐った。」ヤコブの側近とも思われる人が、「あなたの子であるヨセフが来られました。」告げたのです。それを聞けば、自分の子とは言え、大きな世話になっているエジプトの宰相ヨセフと相対するために、ヤコブは弱る体を必死になって起こして、床に座りました。

③ルズの地における祝福の言葉 (3～4) 「ヤコブはヨセフに言った。『全能の神がカナンの地ルズで私に現れ、私を祝福して、私に仰せられた。『わたしはあなたに多くの子を与えよう。あなたをふやし、あなたを多くの民のつどいとし、またこの地をあなたの後の子孫に与え、永久の所有としよう』ヤコブはヨセフに重大なことを伝えようとしていたのです。まずは、ヤコブは自らの神体験を伝えます。それははるか昔、ヤコブがエサウから逃れて北の地の叔父ラバンの家に向かう途上、ルズ (後のベテル) という地で彼は石を枕として休んだのです。その時、天使が天地を結ぶ梯子を上り下りする夢を見たのです。そして、神からの言葉を受けたのです。それは、神はヤコブの子孫を増え広げ、カナンの地をその子孫に与えるというものでした (28章)。

2. ヨセフの子をも (5～7節)

①ヤコブにつながる子 (5) 「今、私がエジプトに来る前に、エジプトの地で生まれたあなたのふたりの子は、私の子となる。エフライムとマナセはルベンやシメオンと同じように私の子にする。」ヨセフはエジプトの宰相になった時に、パロからオンの祭司の娘アセナテを妻として与えられました (41:45)。そして、ききんが来る前にマナセとエフライムを子どもとして授かりました (41:51-52)。ヤコブがエジプトに来た時に、二人はまだ子供でしたが、今や立派な青年となりました。ヤコブはヨセフの二人の子ども達を長男ルベンや次男シメオンと同じように子とすると断言しているのです。孫ではなく、子とするというのです。いわば、養子として受け入れると述べているのです。



- ②他の子達 (6) 「しかしあとからあなたに生まれる子どもはあなたのものになる。しかし、彼らが家を継ぐ場合、彼らは、彼らの兄たちの名を名のらなければならない。」しかし、ヤコブがエジプトに来た後に、ヨセフに生まれた子達については養子とはせずに、ヨセフにつながり、家を継ぐ場合には兄達の名を名乗ることになるというのです。
- ③ラケルのこと (7) 「私のことを言えば、私がパダンから帰って来たとき、その途上カナンの地で、悲しいことに、ラケルが死んだ。そこからエフラテに行くには、なお道のりがあったが、私はエフラテ、すなわちベツレヘムへの道のその場所に彼女を葬った。」ここでヤコブが感極まって、自分の妻ラケルのことを述べています。ヤコブが愛した妻ラケルは、エフラテ (ベツレヘム) に向かう途上で、命を落とし、そこに葬られたのです。なんとも悲しく、胸の傷むことであったことか。ヤコブはつらい人生の一断面を思い出して吐露しているのです。

3. ヤコブとヨセフと子供たち (8~12 節)

- ①これはだれか (8~9) 「イスラエルはヨセフの子らに気づいて言った。『これはだれか。』」ヨセフは父に答えた。『神がここで私に授けてくださった子どもです。』すると父は、『彼らを私のところに連れて来なさい。私は彼らを祝福しよう』と言った。」それまでは気づかなかったようです。イスラエル (ヤコブ) はヨセフの近くに人の気配を感じて、「誰だ?」と尋ねたのです。ヨセフは、彼らがこの地で授けられた息子達であることを告げます。すると父ヤコブは「連れて来なさい。彼らを祝福するから」と伝えます。
- ②ヨセフの子たちを抱き (10) 「イスラエルの目は老齢のためにかすんでいて、見るができなかった。それでヨセフが彼らを父のところに近寄らせると、父は彼らに口づけし、彼らを抱いた。」実を言うと、ヤコブは老齢のゆえに目がほとんど見えなくなっていたのです。かつてイサクも目が見えずに、エサウにではなく、弟のヤコブに祝福を与えてしまったという出来事がありました。ヤコブは今、近寄ってきたヨセフの二人の息子に口づけをし、彼らをしっかりと抱いたのです。
- ③ヨセフの礼拝 (11~12) 「イスラエルはヨセフに言った『私はあなたの顔がみられようとは思わなかったのに、今こうして、神はあなたの子どもをも私に見せて下さった。』」ヨセフはヤコブのひざから彼らを引き寄せて、顔を地に着けて、伏し拝んだ。」ヨセフは感慨深げに言います。ヨセフよ。「私はお前がいなくなった時から、もう死んだものだと思い、20年もの年月を過ごしたのだ。再会できるなどとは夢にも思わなかった。それがお前に再会できたばかりでなく、神はこの地で生まれたお前の子ども達にも会わせて下さった。なんと感謝なことか。」ヨセフはここまで聞くと、二人の息子をヤコブのひざから引き寄せて、ともに顔を地に着けて、主を礼拝したのです。ヨセフに

とつても、格別の時であり、主の恵みをかみしめる時でありました。《結論》48章の時代背景ですが、飢饉の時から15年以上はたっています。ヤコブも147歳となり、死を目の前にしていました。ヨセフも豊作

から飢饉の時代において、主なる神からの賢い知恵をいただき、宰相としての務めを継続していたようです。今ここに、ヨセフは父の病気が進み、死が近そうだという連絡を受け、息子のマナセとエフライムを伴って、ゴシェンの地のラメセスにある父ヤコブ一家が住む家を訪問したのです。これが生前に会う最後の時になるかもしれないという思いもあったことでしょう。ヤコブもヨセフが来たということで、力を振り絞って床の上に座って、いわば遺言を伝えたのです。

ヤコブがヨセフに伝えたことの第一は、若い時代に叔父のいるパダン・アラムに向かう道で主より与えられた約束の御言葉についてでした。それは『わたしはあなたに多くの子を与えよう。あなたをふやし、あなたを多くの民のつどいとし、またこの地をあなたの後の子孫に与え、永久の所有としよう』というものでした。カナンの地での祝福が述べられていますが、エジプトでヤコブの家族のために尽くした、ヨセフの子孫はどうなるのでしょうか。ヤコブに与えられた導きは、ヨセフの子であるエフライムとマナセを自らの養子として迎えるというものでした。子供達がヤコブの家系につながっていくということは、約束の神を信じるヨセフには喜びだったでしょう。同行したエフライムとマナセたちを抱いて、「祝福しよう」と言われたことにも感動したでしょう。

さらに、ヤコブが脈略なく伝えたラケルの死の出来事が伝えられたことはヨセフの心の琴線に触れることでした。なぜなら、ラケルはヨセフの母であったからです。なつかしい母親の記憶がよみがえって来たことと思われます。

死を前にした父ヤコブからの言葉は、ヨセフ自身もその歩んできた人生をも改めて振り返り、来し方を導いてきて下さった主の大いなる恵みを覚える時であったでしょう。

「それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めも
ま
う
たキリストによってあふれているからです。」(Ⅱコリント 1:5) とい

御言葉があります。ヨセフの人生には確かに、苦難がありました。兄達に売られてエジプトにきたこと、牢獄に入れられことなどは、その当時のヨセフには「どうしてこうなるのか」と理解に苦しむことだったでしょう。しかし、エジプトの宰相になり働きをなし、父や兄弟達との再会し、子供たちはヤコブ (イスラエル) の子孫としてつながっていけるという約束を受け、主なる神の大いなる恵みを味わったこと

でしょう。

ヨセフは子供たちを引き寄せて、感謝を込め、顔を地に着けて、神を礼拝しました。それは、恵み深い神の、人間の考えを越えた大いなる御手をほめたたえ、喜ぶ時でした。私たちも同じです。あなたが苦難、試練と思える最中にあるとしても、その向こう側に恵みに満ちたいつくしみ深い主の慰めがあることを信じ歩いていこうではありませんか。